

二〇二一年度 武蔵野東中学校 入学試験

国  
語

問題は1ページからです。

一 次の①～⑤の―線部の漢字には読み仮名をつけ、⑥～⑩の―線部の仮名は漢字に直して書きなさい。必要に応じて送り仮名もつけなさい。

- ① 雨で運動会は順延になった。
- ② 複雑な筋立ての推理小説。
- ③ 冬至の日はゆず湯に入る。
- ④ 車窓の景色を楽しむ。
- ⑤ 今日がこの映画の見納めだ。
- ⑥ 報道キカンで働く。
- ⑦ 農地をたがやす。
- ⑧ 本人のテキセイに合わせる。
- ⑨ 受付用のゲートをもうける。
- ⑩ フリオウ品を取りかえる。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。  
(\*印がついている言葉には、本文の後に「注」があります。)

おばあちゃんが\*夜間中学に行くと言ったとき、お母さんは「いいことだ」と言って、①わたしもうなずいた。でも、本当は、なんでこんなに年をとってから勉強したいと思うのか不思議だった。今もそう思っている。なんのために行くんだろう。中学を出たって、この先高校や大学に行くわけでもないのに。字が読めないのは不便だけれど、今まで何十年もそうやって過ごしてきたのだから、今さら習わなくてもいいのじゃないか。

わたしだったら、学校に行きたいなんて絶対に考えないと思う。夕方に出て行って勉強して、夜遅く帰って来るなんて、まっぴらだ。夜は、テレビを見たり、家でごろごろしてたりするほうが断然いい。

それに、わたしは、どうしても納得できないているのだ。おばあちゃんが、小学校すらまともに行っていないという事実について。

お母さんは、「戦後の混乱」と言ったけど、戦争が終わったときはまだ五歳だったはずだ。小学校に行く年齢じゃない。じゃあ、戦後の混乱なんて関係ないのではないか。もしかしたら、一年生のときはまだ大変だったかもしれないけれど、さすがに高学年になるころには、おさまっていたのではないだろうか。中学なら、絶対影響なんてなかった気がする。

それなのに行かなかったおばあちゃんは、本当はなまけていたので

はないだろうか。

わたしは、思いきって聞いてみた。

「ねえ、どうして子どものころ学校に行かなかったの？ 戦後がどうのこうのっていつても、おばあちゃんが小学校に上がる一年以上前に戦争は終わってたんでしょ。行こうと思えば、行けたんじゃないの？」

たぶん、ちよつと<sup>②</sup>意地悪な気持ちになってたんだと思う。おばあちゃんが、あんまり楽しそうで、一生懸命勉強してる真面目<sup>まじめ</sup>ちゃんだから。本当は昔、さぼってたんじゃないのって、言ってやりたいような気持ちだったのだ。

おばあちゃんは、少し困った顔をした。

「そうだねえ。行こうと思えば、行けたのかもしれないねえ」  
やっぱり、と思った。本当は行けたんだ。

「でも、学校なんて、自分には縁<sup>えん</sup>のないものって思ってたんだよ」

「それですんじやったの？ 家の人や先生にしかられたりしなかった？」

「しかられないよ」

おばあちゃんは、<sup>③</sup>悪びれる様子もなく答えた。

「ずいぶんのんきな時代だ。今だったら、「不登校だ」とか「親はなにしてるんだ」とか世間が放っておかないだろう。」

「そんな子はあたしだけじゃなかったし。家が貧しくて、働いてる子どもだっていた。子どもも働き手だったんだ。働かなきゃ食べていけない時代だったんだよ」

「子どもなの？」

そんなのおかしい。芸能界の子役ならまだしも、子どもを雇うところなんてあるはずがない。そんな嘘<sup>うそ</sup>をつかないで、学校に行きたくなかったのなら、「行きたくなかったのだ」と正直に認めればいいのに。

だけど、そのあとに続いたおばあちゃんの話に、<sup>④</sup>わたしは自分がいかに甘いかを思い知らされた。

「戦争が終わったからっていつて、一年や二年で元どおりになるなんてことはなかったんだよ。死んじゃった人は帰って来ないしね。父親は戦争に行つて、そのまま帰って来なかったんだ。ゆうなは知らないと思うけど、あたしにはふたつ下の弟がいてね。母親がひとりで、あたしたちと体の悪いおばあさんをみてくれてたんだよ。母親が働きに行つている間、洗濯<sup>せんたく</sup>したり、ごはんを炊<sup>た</sup>いたり、弟のお守りをしたり、おばあさんの世話をしたりするのは、あたしの役目だったんだ」

「おばあちゃんの役目って……。まだ五歳だったんでしょ」  
五歳といえは、まだ幼稚園<sup>ようちえんじ</sup>児だ。少し前までおむつをしていたような年だ。そんな子が家事をした？

おばあちゃんは、昔のことを思い出すように<sup>⑤</sup>目を細めた。

「ごはんひとつ炊くのも、今とは比べものにならないくらい手間がかかったんだよ。うちは貧しくてガスなんてなかったからさ、木で炊<sup>た</sup>くんだよ。かまどでね。ごはんを炊いて、お汁を作つて」

「そんな小さい子が、火なんて使つて危険じゃないの？」

火は危ないと、さんざん言い聞かされて育つてきた。わたしだけじゃ

なくて、同級生の子たちもみんなそうだ。初めてマッチで火をつけたのは、五年生の理科だ。マッチをするたびにドキドキした。家庭科でガスを使うときは、さらに大事だった。それを五歳で？

「今から思えば危ないよねえ」

おばあちゃんは、笑った。

「洗濯せんたくでもなんでも、機械なんてないからさ、みんな手洗いで。冬はつらかったよ。弟はぐずぐず泣いてばかりだし。ちよつとでも時間があるときは、くず拾いをしたんだ。釘くぎとかネジとかを拾って『くず屋さん』に持って行くと、お金をくれるんだ。農家に手伝いにも行った。農家には、わたしと同じように学校に行かないで働いている子が何人もいたよ」

「おばあちゃん以外にもってこと？」

「ああ、戦争が終わった直後は、親のいない行くあてもない子は、のきなみ農家に連れて行かれることもあったんだよ」

「でも……、そんなのいいの？ 法律とか」

くわしいことはわからないが、許される話ではない気がする。けれど、おばあちゃんはあるさきり言った。

「死ぬよりはましだよ」

（⑥）か、（⑦）か。子どもがそんな選択せんたくを迫られる時代だったのだ。

「あたしはね、家族もいたし、住む家だってあった。だから、それだけで幸せと思わなきゃいけなかったんだ」

おばあちゃんは、かみしめるように言った。

「小学校には、何回か行ったんだよ。弟を連れてね。でも、たまにしか行かないから、席がないんだよ。それで、先生が来るまでずっと立って待つていなきゃいけなくてさ。それがいちばんイヤだったね。底なしの貧乏びんぼうだったから身なりも汚きたないし、お弁当も持って行けないし。バカにされるのもイヤだったんだよ。でも、今考えれば、ゆうなの言うとおり、行こうと思えば行けたのかもしれない」

小さな弟の手を引いて学校に行く女の子。想像してみようとしたけれど、今ひとつ明確には思い描けなかった。でも、もし、それが自分だったら耐たえられないと思った。

「結局小学校はほとんど行かなかったけど、先生は、なんにも言わなかったよ。言ってもどうしようもないって思ってたんだらうね」

「……おばあちゃんのお母さんは？」

自分の子どもが学校に行けないのに、なんにも言わなかったんだらうか。

「なんにも言わなかったよ」

おばあちゃんは、優しい顔で言った。

「なんにも言えなかったんだよ、きつと」

おばあちゃんの目は、遠くのほうを見つめていた。まるでそこに、自分のお母さんの姿が見えるみたいに。

「あたしはね、学校に行くより、弟の世話をしたり、ごはんを作ったりしてるほうがよかったんだよ。合間を見て働くこともつらくなかった。

自分が家族を支えていると思うと、うれしくらいだった。ずっと、そう思ってた。でもね、あるとき、ごはんを炊きながら、<sup>ほのお</sup>炎を見てたんだ。めらめら薪が燃える様子をさ。そしたら、<sup>たきぎ</sup>急に涙がぼろぼろ落ちてきてさ。気がついたらおいおい泣いてた。あのとき、なんで泣いたのか自分でもわからなかったけど、もしかしたら、胸の奥のほうではつらかったのかもしれないねえ」

かまどの前で、ひとり泣いている小さな女の子の姿を思うと、胸が痛んだ。小さいころのおばあちゃんに会いに行ってきたきしめてあげたいと思った。って。

(山本悦子「夜間中学へようこそ」より)

(注)夜間中学…公立の中学校の夜間学級のことをいい、戦後の混乱期の中で義務教育を修了できなかった人や、様々な理由から本国で義務教育を修了せずに日本で生活を始めることになった外国籍の人など、多様な背景を持つた人たちが学んでいる。

問一 — ①「わたし」の名前を本文中から三字で書きぬきなさい。

問二 — ②「<sup>いじわる</sup>意地悪な気持ち」とありますが、「わたし」がおばあちゃんのことを、心の中でからかって呼んでいることを本文中から六字で書きぬきなさい。

問三 — ③「悪びれる」とありますが、その意味を辞書で調べてみた結果を次の文章にまとめました。( ) A～Eにあてはまることばを、あとのア～カから一つずつ選び、記号で答えなさい。

・「悪びれる」を辞書で調べたところ、「( ) A ( ) する。( ) B ( ) と ( ) C ( ) ふるまう。」とありました。しかし、「( ) A ( )」の意味がよくわからなかったので、もう一度辞書で調べたところ、「( ) D ( ) て、( ) E ( ) こと。」とあり、なんとなく理解することができました。

ア おどおど	イ ひょうひょう	ウ 気おくれ
エ おそれ	オ 見苦しく	カ ひるむ

問四 — ④ 「わたしは自分がいかに甘いかを思い知らされた」とありますが、それはおばあちゃんが学校に行かないで家でしていたことを知ったからです。おばあちゃんの家での役目を本文中から五十字程度（句読点を含みます）で探し、「こと」につながるように、その最初と最後の五字を書きぬきなさい。

問五 — ⑤ 「目を細め」とありますが、「目を細める」は、「うれしさと顔中に笑みを浮かべる」という意味の慣用句です。次のA～Dは「目」を使用した慣用句ですが、それぞれの意味をあとのア～オから一つずつ選び、記号で答えなさい。

- A 目が効く                      B 目が肥える  
C 目に物見せる                D 目に余る

- ア ひどい目に合わせる。  
イ あまりに速くて見定められない。  
ウ 見分ける力がすぐれている。  
エ することがひどすぎてだまって見ていられない。  
オ よいものを見なれてものを見分ける力が増す。

問六 本文中の（                      ）⑥・⑦にあてはまる動詞（動作を表すことば）を、⑥は本文中から二字で書きぬき、⑦は本文中のことばを使って二字で書きなさい。

問七 — ⑧ 「急に涙がぼろぼろ落ちてきてさ。気がついたらおいおい泣いてた」とありますが、このときのおばあちゃんはどういう気持ちであったと考えられますか。二十五字以内で書きなさい。

問八 本文中の  にあてはまる、「私」からおばあちゃんへの呼びかけの言葉を考え、十五字以内で書きなさい。

③ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

地球上に今いる生命はすべて同じ祖先から進化してきた。バクテリアから人間まで、そういう意味では親戚なんだ。生命というものが地球上で一度しか発生しなかったのか、実は何度も発生しかけたのかはわからない。A、生き残れたのが今のこの系統だけということははっきりしている。少なくとも、わかっている範囲ではそうだ。もしかしたら、将来、地下深くで全然別の生命が発見されなくても限らないけど。

じゃあ、① 僕たち人類が今この地球上にいるというのは、どのくらいめずらしくて、奇跡的な事件なんだろう。

最近、太陽系の中で地球以外の場所にも生命がいておかしくないと考えられるようになってきた。火星にだって、かつては生命がいたんじゃないかと考える研究者は少なくない。B、もしかすると、生命の発生という現象自体は宇宙の中でそれほどめずらしいできごとじゃないのかもしれないね。

今のところ、地球外の生命がどんなものなのかは想像するしかない。C、アミノ酸のような物質はわりとありふれたものらしいので、地球の生命とひどくかけはなれてはいない生命もたくさんいるのかもしれない。

仮に生命が宇宙ではそれほど珍しくないものだとして、それじゃあ知性を持つほどまで進化した生物もありふれた存在なんだろうか。

② この疑問に対して、ある人たちは、この宇宙の中で地球に誕生した

生命だけがたまたま知性を獲得したなんて、そんな偶然はありそうにない、という。地球で知性が生まれたんだから、宇宙のいろいろな場所でも生まれているはず、というわけ。

たしかにそれはもっともらしい話だし、僕もそれに賛成ではあるのだけど、実はこういう問題で「たまたま地球だけなんて、ありそうにな」という理屈を使っているかどうかは誰にもわからない。というより、③ 実はそれではまったく理屈になっていないんだ。

たまたま地球にだけ知性が誕生して、ほかでもない自分がその中にいる。そんな奇跡が自分の身に起こるとは思えないと、そう言っちゃっているのかといえ、そうじゃないよね。自分がこの星に生まれて、ほかのどこでもないこの星にいて、D、現に自分がこの星にいるというよりは誰よりも自分がよく知っているんだから。

知性の誕生は本当はものすごく稀なできごとで、もしかしたら、この宇宙のどこを探しても地球以外に知性なんかひとつも誕生しなかったのかもしれない。仮にそうだったのだとしても、やっぱり今これを書いている僕はここにいて、読んでいるあなたはそこにいるというその事実に変わりはないんだ。

知性が宇宙全体を見回してもごく稀なものなのかそうじゃないのか。僕たちがここにいてという事実だけからは、どちらであるとも言うことはできない。

E、宇宙にどれくらい知的生命体がいるかという話になると真っ先に思い出されるのがドレイク方程式ってやつ。これは、他の星の



文明と交信できるくらい発達した文明がこの銀河系内に今現在いくつくらいあるかを見積もるための公式で、半世紀ほど前に天文学者のフランク・ドレークが提唱した。

見積もるには、宇宙には生命が発生しそうな星がどれくらいあって、その何割くらいに実際に生命が発生して、その何割に知的生命体が生まれ、といった数をそれぞれ見積もって掛け合わせればいい。いくつかの数は科学的根拠をもって見積もれるし、いくつかはかなり曖昧にしかわからない。

その中でも一番曖昧なのが、「(F)の存続できる(G)の長さ」だ。高度に発達した文明は非常に長く続くものなのか、それとも武器を作ることをおぼえた文明は、戦争によって短時間で滅びてしまう運命なのか。それは誰にもわからない。そして、その見積もりによって、答は何桁も変わってしまう。

この方程式は、(H) というより、(I) というべきなんだろうね。

(J)的に考えるか(K)的に考えるか。この宇宙の中で人類は孤独な存在なのか、それともたくさん仲間がいるのかは、ドレーク方程式を見る限り、文明がどれほど長く続くかにかかっている。

知性の誕生がどんなに稀なできごとなのだとしても、それは僕たち自身の身実際に起きている。なぜなら、僕たちが自分の存在を認識できるのは、僕たち自身が知的生命として今まさに存在しているというその事実のおかげだから。

いや、仮に知性が宇宙の中でありふれたものだったって、この地球で人類が誕生して自分が今存在しているのは、宇宙の歴史でたった一度しか起きなかったできごとなんだ。だから、知性の誕生が稀であっても稀でなくても、自分がここにいることは奇跡でもあり、そして必然でもある。

(菊池誠「科学と神秘のあいだ」より)

問一 本文中の  A ~ E にあてはまることばを、次のア ~ カから一つずつ選び、記号で答えなさい。

- |   |      |   |     |   |     |
|---|------|---|-----|---|-----|
| ア | でも   | イ | だから | ウ | そして |
| エ | ところで | オ | つまり | カ | ただ  |

問二 — 線①「僕たち人類が今この地球上にいるというのは、どのくらいめずらしくて、奇跡的な事件なんだろう。」とありますが、この著者から読者への問いかけとは反対の内容となる著者の問いかけの部分を、本文中から四十五字以内(句読点を含みます)で探し、その最初と最後のことばを五字で書きぬきなさい。

問三 — ② 「この疑問」とありますが、

(一) どのような疑問ですか。「くく」という疑問」という形で答える場合、「くく」にあてはまることばを本文中から三十字以内で書きぬきなさい。

(2) 「この疑問」に対する筆者の考えとして正しいものを次のア～ウから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 宇宙の中で、知性を持つほどまで進化した生物はありふれた存在である。

イ 宇宙の中で、知性を持つほどまで進化した生物はありふれた存在ではない。

ウ 宇宙の中で、知性を持つほどまで進化した生物はありふれた存在であるともそうでないとも、どちらも言えない。

問四 ( ) ( F・G にあてはまることばを、本文中からそれぞれ二  
字で書きぬきなさい。

問五 ( ) ( H・I には、次のア・イのどちらかがあては

まります。H にあてはまるのは、ア・イのどちらですか。記号で答えなさい。

ア 通信できる文明の数を科学的に推定する式  
イ 文明というものについての信念を表明するための式

問六 ( ) ( J・K にあてはまる対義語の組み合わせとして適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 主観・客観  
イ 悲観・楽観  
ウ 直接・間接  
エ 消極・積極

問七 この文章で筆者が読者に言いたいこと(要旨)をまとめた次の文の( ) (ア)オにあてはまることはを、指定の字数で本文中から書きぬきなさい。

・(ア・五字)が稀であろうがなからうが、私たちが自分の存在を認識できるのは、私たち自身が(イ・四字)として今存在しているという(ウ・二字)のおかげであり、自分がここにいることは(エ・二字)でもあり、また(オ・二字)でもある。

二〇二一年度 武蔵野東中学校 入学試験 国語 解答用紙

\*のらんには何も記入しないこと

氏名

⑥	①
⑦	②
⑧	③
⑨	④
⑩	⑤

*
---

問八	問七	問六	問五	問四	問三	問二	問一
		⑥	A	最初	A		
		⑦	B		B		
			C	最後	C		
			D		D		
				こと	E		
って。							

*
---

問七	問六	問五	問四	問三		問二	問一
ア			F	(2)	(1)	最初	A
			G				B
イ						最後	C
							D
ウ					という疑問		E
エ							
オ							

*
---

二〇二一年度 武蔵野東中学校 入学試験 国語 模範解答

\*のらんには何も記入しないこと

／15 一

各2点	各1点
⑥	①
機関	じゅんえん
⑦	②
耕す	すじ
⑧	③
適性	とうじ
⑨	④
設ける	しゃそう
⑩	⑤
不良	みおさ

\*

／40 二

	5点	5点	各4点	各1点	5点	各1点	4点	4点
問八	問七	問六	問五	問四	問三	問二	問一	
が	学	⑥	A	最初	A	真	ゆ	
ん	校	死	ウ	母	ウ	面	う	
ば	に	ぬ		親		目	な	
っ	通	⑦	B	が	B	ち		
て	え	働	オ	働	ア	や		
る	な	く		き		ん		
ね	い		C	最後	C			
。	自		ア	し	オ			
え	分			た				
ら	の		D	り	D			
い	こ		エ	す	エ			
ね	と			る				
	を			こと	E			
	悲				カ			
	し							
	く							
って。	思							
	う							
	気							
	持							
	ち							
	。							

\*

／45 三

	各2点	5点	4点	各3点	5点	5点	各1点	
問七	問六	問五	問四	問三	問二	問一		
ア	イ	ア	F	(2)	(1)	最初	A	
知			文	ウ	た	知	生	ア
性			明		存	性	命	
の			G		在	を	の	B
誕			期		な	持	発	イ
生			間		ん	つ	生	
イ					だ	ほ	最後	C
知					ろ	ど	れ	カ
的					う	ま	な	
生					か	で	い	D
命						進	ね	ウ
ウ					と	化	。	
事					い	し		E
実					う	た		
エ					疑	生		E
奇					問	物		
跡						も		
オ						あ		
必						り		
然						ふ		
						れ		

\*